

4年ぶり高校生チャンピオン



**福岡・沖学園高3年の出利葉太郎(筑紫ヶ丘)が7アンダー281で初優勝
苦しみながら最終18番のバーディーで勝負を決める**

そのバーディーパットが入らなければ、4人によるプレーオフになるところだった。通算6アンダーで迎えた最終18番ロング(536ヤ)。出利葉太郎は第3打をピン上7mにつけた。決してやさしくはない下りの軽いスライスラインに乗ったボールはカップに沈んだ。出利葉はカップインと同時に右手を握りしめた。

「最後をバーディーで決めて、気持ち良く終わったので嬉しくて。ガッツポーズは自然と出たんです。最後までどんな状況だったか分かりませんでした」

終わってみれば、第45回大会の古川雄大(当時福岡第一高3年、大博多)以来の高校生チャンピオン誕生となったが、実に苦しいラウンドであった。最終日、2位以下に5打差の10アンダーでスタート。大きなリードと思われたが、ショットが乱れ5番まで1度もパーオンできずに4ボギーで6アンダーまで落とす。同じ最終組で回っていた芹澤慈眼(久住高原)が5番までに3つのバーディーを奪って、このホールで逆に2打差をつけられた。「調子は良かったんですけど。気



持ちの部分でしょう。緊張していたんでしょう」と出利葉は苦しいラウンドを振り返った。

しかし、インに入ると、芹澤が崩れる。10番のバーディーで10アンダーとしながら、ともに第1打を11番ショートで池に入れ、13番ミドルでは林に打ち込んだ。いずれもダブルボギー。13番終了時点で4選手が6アンダーで並ぶ大混戦となった。

出利葉にとって「九州」という冠のつくタイトルは2年前の九州ジュニア15～17歳の部以来。ゴルフを始めたのは福岡市の片江小2年からで、テンフィンガー（ベースボール）グリップを勧める篠塚武久氏の「桜美ゴルフハウス」に通う。プロの時松隆光の活躍で脚光を浴びたグリップだ。「最初からこのグリップです。当初は戸惑いもあったけど、源蔵さん（時松の本名）の優勝で自信が持てました。今では信じてやっています」と出利葉の頼もしい武器となっている。

日本アマは4度目の挑戦となる。これまでの最高は16位。「上位に入れるよう準備をします」と高校生チャンピオンは静かに闘志を燃やした。今回のピンの位置は第1日を除き第2日からは昨年プロのトーナメント、ダンロップ・フェニックスオープン2日目からのポジションとほぼ同じ。そんな中で出利葉は第3日に初日同様66のビッグスコアを出した。爆発力も彼の魅力の一つである。

< 2位タイの3人 >

古川雄大 (大博多)「まだまだスイングが固まっていません。でも、調子以上のスコアは出せたと思います。今回成長したのはショットが曲がっても、パットでどうにかまとめることができたことです。今回は出利葉君がいいゴルフをしました」

芹澤慈眼 (久住高原)「前半は思ったより良くて。4打差のリードがあっても（優勝は）気にしていなかった。1打1打を大事にしよう、と。ただ、11番と13番は攻めるべきではなかったのかな、とは思います。パットは良かったですね」

石塚祥成 (福岡雷山)「アイアンが駄目でした。日に日にアイアンが左へ行くようになって。12、14番はフェアウエーから乗せられずにボギー。これが敗因でした。日本アマでは一緒石塚祥利）に負けないようにします」



写真は左から石塚、芹澤、古川

